

Ⅱ. 特になし

1. 歩行

①②素足で水田の溝きり中、異物が足に刺さった

(同一人による同様の事故平成21年 7月、平成22年 7月 自宅水田、男・61歳、62歳)

家の前の水田約20 a を溝切り機で排水のための溝を素足で切っていて、水田に異物を踏み、足の裏に刺さった。

第1事例は、水田の横の畦際に水島柿6本、および樹齢30年余りのカリンの木が植えてあり、秋には、小枝が水田落ちる事もあり、大きいものは荒起こし前の春先に毎年除いていた。素足で溝切り機を使って、カリンの植えてある近くで、足に刺さった。



第2事例もほぼ同じ場所で、水田に

紛れ込んでいた古釘を踏み抜いた。昔からの言い伝え通り、足裏を強く足踏みで踏んでおいた。数日後、足が化膿し出したので、受診した。

第1事例、第2事例とも数日を経過してから化膿し、総合病院を受診、ともに入院となり、第1事例の場合は、数日後夕方から高熱を発し、また足に荷重がかからず、総合病院を受診、破傷風に感染した可能性もあるということで予防薬を注射し、1週間入院。



第2事例の場合も数日後、化膿し、熱も発症、総合病院受診、即入院となった。蜂窩織炎であり7日間入院後、通院111日におよんだ。

本人は有機農業者で、合鴨除草を実践している。兼業農家でもあり、多忙であり、例えば仕事から帰宅すると、鴨たちが思わぬところに行っている事も日常的にあり、水田に飛び込んで捕まえに行く事ある。その際、いちいち、自宅に帰って水田長靴などに履き替えていると、とんでもない所へ鴨たちが行ってしまうこともあり、すぐ通勤用の靴を脱ぎ捨てて、田に入る事も日常化している。このようにもともと、素足で田に入る事が日常化していた。

さらに、本人の考えの中に昔から、祖父や父は当然、田に入るときには素足で作業しており、その方が「自然だ」との考えがある。だから第1事例を体験した後も、素足で水田に入り、翌年に同様の事故を同じ作業、同じ水田で経験した。

さすがに、これではいけないと思い、その後水田長靴を履くようにしたが、本人曰く、

「水田長靴は、履くのも大変、脱ぐのも大変」であり、もっと簡単に脱着できる靴はないのかと思っている。

③ 柑橘畑から道路へ出るとき、水路を跨ぎきれず転倒、眼窩打撲

(平成23年 4月15時頃、柑橘園地、男・81歳)

畑から農道へ出ようと水路を跨いだ時、上手く越えられず、前方方向に転倒し、右目尻を打撲した。

水路の道路側は、角度(40度)がついている。水路を跨いだ際、その部分に足をついたためバランスを崩して転倒した。事故後、病院に行き右目尻の打撲と診断され治療を受けた。

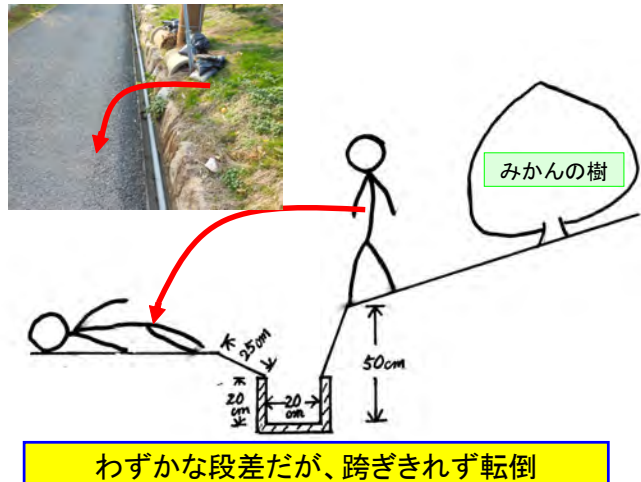
前年の10月と同年1月にも農作業中の事故によりケガをしている。いずれも、バランスを崩して転倒し事故が起きている。高齢による心身機能の低下が事故の発生原因と考えられる。

平成22年10月 当時80歳

- ・柑橘園場にて、柑橘樹の剪定作業中に園場内の石につまづいて後方に向かって転倒した。園場内の石の除去と後方の安全確認を怠っていた。転倒の際に切り株で右ふくらはぎ部分を裂傷した。

平成23年 1月 当時81歳

- ・自宅倉庫(ゆるやかな傾斜有り)にてじゃがいもの選別作業中、立ち上がった際に普段の慣れによる不注意により、バランスを崩し転倒し、左肩を負傷した。



街中では、「障害者や高齢者に優しいまち作り」が叫ばれ、様々な施策が施されている。今、農村における農作業は、圧倒的多数の高齢者で担われている。と、いう事は今の時代「高齢者が農作業を続けるのに優しい農村作り」を考えてもいいのではなかろうか。

今回の事例では、わずかな段差、わずかな傾斜が事故の原因となっている。この事例の場合、例えば階段の設置やスロープがあれば起きなかった事故である。農村高齢者が農作業を続ける事が出来ることという事は、「青空ディサービス」でもある。福祉施設のディサービスのみではなく、福祉予算の面からも農村への支えも検討できないものだろうか。

2. 火傷

①残っていた混合油？を、枯れ枝にかけて一瞬に燃え上がり火傷

(平成21年 9月11時頃、自宅横の畑、女・59歳)

黒マルチや小枝を集めて、火を点けたがよく燃えなかった。そこで、一斗缶に残っていた油をギアオイルか何かの缶に小分けしたものを、ぶっかけた途端、火が燃え上がり、腕、顔に火がつき火傷を負った。

直後にすぐ、ふろ場に行ってシャワーを浴び水をかけた。救急車を呼ぼうかとも思ったが、夫に病院に連れて行ってもらい、形成外科を受診、約一週間入院。植皮は特にせず、塗り薬とガーゼ交換をした。退院してからも顔面が気になってケアをして、今は全く跡がないのだが、腕の方のケアがおろそかになり、かなり火傷の跡が残ってしまった。両側上肢Ⅱ度熱傷、顔面熱傷。

夫からは、油をかけるとな、ともいわれていたが、少しぐらいいいだろうと思い、かけてしまった。

ご本人はガソリンとっておられたようだが、「一斗缶」に入っていた、との事であるので、おそらく混合油と思われる。混合油もガソリンにわずかにオイルを混ぜるのみで、ほとんどがガソリンと言ってもいいものである。以前は、一斗缶などでもガソリンを販売していたが、今は、身近に保管するガソリンは、専用の赤いタンク以外は小売されない。この真っ赤な色したタンクであれば、これを火にかける事はまずない。



これと同じように、混合油についても、視覚支援があってもいいのではないだろうか。つまり、例えばオレンジ色の容器に入れるとかすれば、「ちょっと待てよ」と思いとどまるのではなからうか。単に馬鹿な事をした、と済ませるのではなく、どうしたらその馬鹿な事と思われる行為を防ぐかについて、工夫があってもいいのではなからうか。

②野火が思いがけず燃え広がり、消火中に火傷

(平成21年 4月11時頃、自宅休耕田、女68歳)

自分の家の休耕田の約50~60cmの草丈の枯れ草を燃やそうと、他に燃え移らないように田の周りの草を刈り取って火を点けた。燃えるのを少し高い所から確認。上手く燃えており、安心して、その田の直下で畑仕事をしていた。

少し経ってふっと見やると、予定外の隣の家の休耕田に飛び火して燃え上がっていた。その隣の田の縁には、前日、村の人達が江浚い(溝掃除)の時刈り取った枯れ草があり、それに燃え移ると、さらにその上の山の木に火が移り、山火事になってしまう。さあ、大変！。慌てて、持っていた鍬や鎌で必死に火を叩きに叩き、約20分位でようやく火を消し

止めた。

消火の時は、気が立っていたので気がつかなかったが、顔、腕、尻を火傷していた。着ていたのはジャージの上下にエプロンで燃えやすかった。また、ゴム手も燃えていた。下着は綿を着ていた。

直後には、気が遠くなりかけたが、これではいけないと思い、水が少しあった

溝にお尻をつけて冷やし、とにかく乗ってきた自転車で約300m先の家にたどり着き、夫に地域の総合病院に連れて行ってもらった。ナイロン系統の衣服を身につけていたので、肌にぴったりくっついて火傷がひどくなった。

野火の際は、消えたと思っても火が残っていたり、また突然風が吹いて、思いがけない方向に飛び火したりするので、目的の場所の消火を完全に確認するまで、目を離さない事が肝要であろうか。

また、目で確認していても思いがけない方向に燃え移る可能性もあるので、衣服は燃えにくい物を身につけ、また、いつでも消火できる体制で臨む事が必要と考えられる。



3. 木のぼり

① 雨の後、柿の木に登り、滑って転落 (平成21年 2月10時半頃、自宅庭、男・73歳)

庭の柿の木の剪定をするため、10時半頃、360cmのアルミのはしごを柿の木に立てかけて上り、木の枝に移って作業を始めようとした時、足を掛けていた枝が濡れていて滑り、危ないと思って慌てて木の枝を握ったが、その枝が太すぎて握りきれず、そのまま、3m下のコンクリートの庭に墜落した。



雨上がりだったので、木肌が滑りやすかった。靴は長靴を履いていた。当日、午後から慰安会で温泉旅行があり、

2時出発にであり、毎年やっている農作業ではあったが、早く終わらせようとその時は焦りがあった。

落ちた直後は、しばらく痛くてうずくまっていたが、とにかくはしごを片付け、玄関まで約3.6mを這いずり、玄関の階段も這いずって上がり、家に入り、昼に帰ってくる息子を待った。12時過ぎに息子におぶって車に乗せてもらい、地域の総合病院を受診、1週間程度コルセットをはめ、37日間入院・治療した。第2、第4腰椎圧迫骨折



足が滑り、危ないと思って、たまたまつかんだ枝が太く握りきれなかった。

雨上がりの滑りやすい木に登り、履き物も長靴であり、かなり不安定かつ滑りやすい状態であった。特に、木の肌は濡れると滑りやすく、無理は禁物である。

また、人は毎年、歳を確実に取っていくわけであり、昨年できたからと言って今年もいつも通りできる訳ではないが、気持ちは元のまま、体力は確実に衰えている、そのアンバランスを自覚する事はかなり難しい。高齢者の体力、判断力の衰えを健診時に測定して、「昨年より、急激に落ちていますよ、ですから、今まで以上に気をつけてくださいね」などとインフォメーションできる検査などの導入が望まれる。

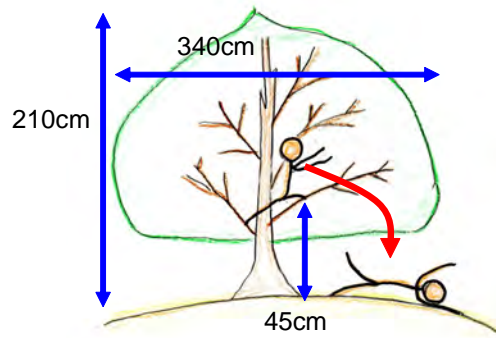
②みかんの樹にのぼり収穫作業中、枝が折れて転落、肩・指骨折等
(平成22年11月 みかん畑、男・72歳)

みかん樹にのぼり収穫作業をしていて、足をかけていた直径6cmの枝が折れ転落した。みかんの樹高は低いものの、地面に接するように、枝葉が茂っており、脚立等が、樹幹に接近することが困難である。直接、樹に昇らざるを得ない事が多い。

その際、肩・指の骨折と頭を7針縫うケガをした。

鳶の仕事の経験からバランス感覚にも自信があり、みかんの樹にのぼっての収穫はよくしていた。

このような樹形をした果実の収穫に適した作業機の開発、導入はどのようになっているのであろうか。



4. 運搬

①ハゼ掛け棒片づけ中、よろけて尻餅をつき、腰骨圧迫骨折、入院

(平成22年11月13時頃、水田、女・83歳)

午後、稲こきをして、はぜかけ棒をかたづけようとして、よじけて、ドスンと尻もちをついた。作業を始めてから、すぐのことだった。痛くて動けなかった。

ご主人の車に乗せてもらい、すぐに病院を受診。入院となったが、手術はしなかった。仰向けに寝て治療。入院 50日間、通院でリハビリ1年間。やっと治癒。

公道に面した水田。自宅からは少し離れているが、将来、住宅用にと購入したもの。コンバインは使用せず、稲刈りをした後、ハゼ掛けで乾燥し、脱穀後にはぜかけ棒を片付ける作業中に事故が起きた。

高齢者の骨粗鬆症は多い。わずかに転んだり尻餅をついただけで、圧迫骨折などが起きる。また、秋作業などの繁忙期となると、高齢者も何か手伝おうとして、年齢を忘れての作業をする事もある。また、現代は繁忙期と農閑期の体力の使い方の落差が激しく、筋力の低下も農閑期には著しく、農繁期前のウォーミングアップを特別に考えてもいい時代と言える。

②薬液を捨てる際、つまずいて転倒、大腿骨頸部骨折

(平成23年 5月14時頃、道路、男・48歳)

友人と2人で柑橘園の防除作業を行い、作業終了後、防除機械等を片付けていた。200ℓの防除タンクを洗浄し、タンクの中の残液を捨てようとトラックの荷台からタンクを持ち上げ移動している時に、右方向の軽トラのかけからミニバイクが走って来るのが見え、慌てて避けようと手前の用水路の穴に足がはまり転倒。その際、コンクリートブロックに腰を強打。



軽トラックが死角になり、バイクが来ることを気づくのが遅れた。

事故後、30分ぐらいして市内の病院へ自家用車で移動した。当初は、痛みがあったものの骨折まではしていないと思い、掛かりつけの病院へ向かった。検査の結果、骨折していたため別の病院で再度検査を行い、大腿骨頸部骨折により、1ヶ月入院。

タンクが重かったのも、バイクが見えたとき焦ってしまった。

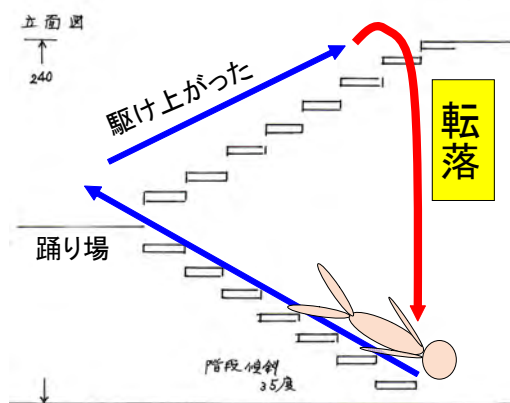
みかん栽培地帯は傾斜が多いだけでなく、道路も細く、またカーブが多い。道路に面した作業などの時は、コーン（道路工事用三角柱）などの注意が必要かもしれない。

5. 階段

階段の手すりを飛び越えようとして、落下、膝・踵骨折

(平成15年 9月17時頃、農作業所、男・55歳、有機農業者)

夕方、雨が急に降ってきて、納屋の2階の窓が開いていたので、急いで階段を駆け上がり、最後の段を上り切らず、手すりをのり超えた方が、窓までの直線距離が短いので、手すりに手をかけ、飛び越えようとしたが、一瞬、「この手すりの取付はしっかりしていただろうか」との思いが頭をよぎり、つかまった手を改めて持ち替えようとして、もちかえ損なって、そのまま、2.4m下の階段に仰向けで転落。



転落直後は、痛みで動けず、すぐ近くにいた妻に車で町内の整形外科病院に1週間入院、さらにその後、総合病院に1ヵ月入院治療。背部の強度の打撲と左膝骨折、左足踵骨骨折。

事故現場となった階段は、自分で制作、設置したものである。旧労働省に「快適な階段とは」と問合せ、資料をもらって制作。傾斜角度は35°、これが人間にとってもっと昇りやすいとの事で、実際の現場の階段の傾斜角も34.5°。



決して急傾斜ではない。7段上って踏み場があり、折り返して上に上がる構造。階段のつくりとしては、大変快適。

ただし、現在階段の上がり口は雑然としていた。事故当日も多分、ものが雑然と足下に置いてあり、邪魔になり、手すりを飛び越えようとした可能性もある。調査時の照度は約100ルクス。事故当時は、これより明るかったとの事であるが、特に照明はされていなかった。

<会社では無事故、家では事故頻発 兼業農業者の宿命？>

本人は電気技術者として、発電所、浄水場などに勤務し、常に事故対応などを行い、自らも職場の責任者として、指揮系統化を工夫し様々な改善を行い、無事故を念頭に仕事をしてきた。

しかし、一方、家での農作業では、兼業小規模農家かつ有機農業者として、経営者かつ

労働者であり寸暇を惜しんでの農作業、消費者との交流など多忙を極めている。有機農業がかなり認知されてきたとはいえ、まだまだ農業関係者の理解が必ずしもある訳ではない。特に、技術的な面で、地方の農業試験場等がこれらの有機農業の技術的支援や研究は散発的には行われているが、系統的なサポート体制とはなっていない。

有機農業者は自分の地域の気候に合った技術を自ら開発、研究をせざるを得ない状況にある。特に、有機農業は手作業が多く、事例のように兼業農家であるとその多忙さは図り知れない。

今回の事例で、本人は「あと1段昇ればいいと言うかも知れないが、その1段上がるその1秒がもったいない」と事である。もちろん、その1秒を惜しんだため、1ヵ月以上入院する事になったのだが。

<暗く、整頓されていない納屋>

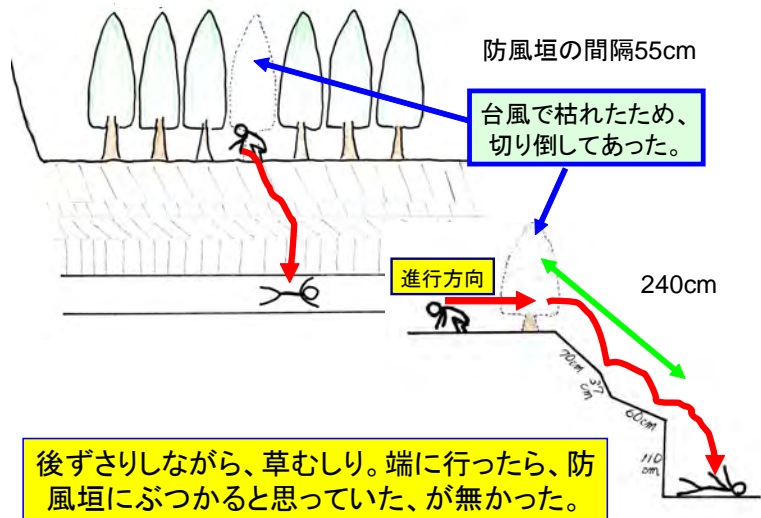
一般に多くの納屋や倉庫の照明は暗い。受傷者本人は「特に暗いとは思わない」と言うのだが、作業環境として暗いが自覚がほとんどない。昔からの慣れであろうが、ハザードマップづくりには、是非、施設内の照度も測定し新たな照明の設置などが必要である。今回の事例でも、暗さの自覚はほとんどなく、暗くて当たり前、となっている。

また、倉庫・納屋も整理整頓をする人と雑然としている人での事故に対するリスクは当然異なる。今回の事例の誘因に「整理整頓」の問題もある。

6. 草むしり

後ずさりして、草をむしっていて、3m下の道路へ転落、右足骨折
 (平成23年 3月15時頃 みかん畑、女・76歳)

自宅横のみかん園地において、後ずさりしながら草むしりをしていました。園地の端っこに行けば、防風垣にぶつかると思って、下がりながら作業をしていたが、下がった場所の防風垣の木が、台風のため枯れていたのを家人が切り取ってしまっており、抜け穴ようになっていた。その間をそのまま後ずさりして、斜面2.4m、さらに落差1.1m下の道路に転落した。



事故発生後、近所の方が発見し脳神経外科で診察、脳に特に異常は無く、市内の別の病院へ搬送、右足骨折していた。3ヶ月間入院した。

息子夫婦が柑橘農業を行っており、自宅周辺の園地の除草作業や収穫作業の手伝いを行っていた。

どんな簡単な作業でも、最初の状況確認が必要だと考えられた。



7. 手作業

りんご畑の鹿除け網を張っている時、坂より転落、胸椎圧迫骨折
(平成23年 6月15時頃 りんご畑の土手、女・83歳)

娘夫婦と3人で、自宅裏のりんご畑で作業をしていた。畑は約40a、ほぼ四角で、上半分は傾斜15~18°、下は5.8°で平らであった。鹿よけのために、高さ1m、長さ25mの網を張ろうとして、土手の藪のバラの木に縛り付けようとした。土手の傾斜は48.6°。杭が1本助かると思ったのがいけなかった。足下に草が茂っていて、坂になって



鹿除け用の網の杭代わりに、藪の木を代用に使おうとしてたが、急坂になっていて滑って2.4m落下

いたため、滑って真っ逆さまに落ちそうなり、慌てて近くにあった竹につかまった。小指くらいの太さだった。そのまま落ちれば大したことは無かったのかも知れないが、竹につかまったために、身体がくるくる周り、2.6m下の畑に転がり落ちた。背中を地面に強打した。第12胸椎圧迫骨折、入院40日、以後通院。今もコルセットは装着し、杖歩行になってしまった。